

## 竹取物語『かぐや姫の昇天』定期テスト対策問題 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 (あ) 謙譲語。

(い) 訳：「(こちらへ) やってまいれ・参上せよ。」

「まうで来(く)」は「参上する・やって来る」という意味の謙譲語で、もとは「参(ま) り出(い) で来」が変化した語です。天人の王が、自分たち(高い側)のいる所へ翁(造麻呂)を呼び寄せている命令なので、「(こちらへ) 参上せよ・やってまいれ」と訳します。

問2 (あ) 種類：尊敬語。もとの動詞の意味：「あり・居(を)り・行く・来」(＝「いらっしゃる・おいでになる」)。

(い) 訳：「(このような) けがれた所に、どうして長くいらっしゃろうか(いや、いらっしゃるべきではない)。」

「いかでか……む」は反語を表し、「どうして～しようか、いや～しない」の意になります。天人がかぐや姫に「早く月へ帰りましょう」とうながしている場面です。

問3 訳：「媼が(大切に)抱いて座っていたかぐや姫は、(家の)外に出ってしまった。」

「ゐ(居)る」は「座っている・じっとしている」の意。文末の「ぬ」は完了の助動詞で、「～してしまった」と訳します。引きとめようとしても、戸も格子もひとりでに開いてしまい、かぐや姫が外へ出てしまう、という不思議で切ない場面です。

問4 (あ) 完了(の助動詞)。

(い) 終止形：ぬ。

完了の助動詞「ぬ」は「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」と活用します。ここは文末なので終止形「ぬ」です(打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」とは別物なので注意。打消なら「出でぬ」＝「出ない」となり文意が通りません)。

問5 傍線部④「奉れ」…種類は謙譲語で、薬を勧める(召し上がる)対象であるかぐや姫に対する敬意を表します。傍線部⑤「聞こしめし」…種類は尊敬語で、その動作主であるかぐや姫に対する敬意を表します。※「奉る」はここでは「(薬を) 召し上がる」の意の敬語とみる立場(教科書に多い)で解説しています。「差し上げる」の意とみる立場もありますが、いずれにせよ敬意の対象がかぐや姫である点が要点です。

問6 不死の薬を飲んでしまうと、地上(人間界)の「けがれ」が体に残ったままでは、月の世界へ帰ったあとに気分が悪くなってしまいます。そこで天人は、けがれを清める意味で、月へ帰る前に薬を召し上がるよう勧めているのである。

問7 もとの動詞：「食ふ・飲む」(の尊敬語)。口語訳：「召し上がる」。

「聞こしめす」は「お聞きになる・お治めになる」など複数の意味を持つ尊敬語ですが、ここでは薬(不死の薬)を飲む場面なので「召し上がる」の意です。

問8 訳：「(天の)羽衣を着せられた人は、(人間の心が消えて)心がすっかり別のもの(＝天人の心)に変わってしまうのだ、という。」

「心異になる」＝「心が(人間のときとは)別のものになる」の意。天の羽衣を着ると、人間だったときの感情や思い(親への情など)がなくなってしまう、ということです。

問9 (あ) 基本形：つ。文法的意味：完了(存続)。

(い) すぐ下の体言「人」に続くため、連体形「つる」になっています。「着せつる人」＝「着せられた(着せてしまった)人」。

問10 天の羽衣を着てしまうと心が変わり、もう人間らしい気持ちで別れの言葉を残せなくなる。そこで羽衣を着る前に、まだ人間の心が残っているうちに、帝へお別れの文(手紙)を書いておこうとしたのです。実際、このあと羽衣を着たかぐや姫は、翁を「いとほし・かなし」と思う気持ちさえ消えてしまいます。

問11 天人が「遅し」と早く帰るよう急かしているのに対し、かぐや姫は少しもあわてず、たいへん落ち着いて静かにふるまっている。すでに月へ帰る運命を受け入れ、地上への未練を断ち切ろうとしている、静かで毅然とした覚悟の心境がうかがえる。

問12 (あ) 「奉り」…謙譲語。「給ふ」…尊敬語。

(い) 「奉り」(差し上げる)は、文を差し上げる相手である朝廷(帝)に対する敬意を表します。「給ふ」は、その動作主であるかぐや姫に対する敬意を表します。

一つの動作に、受け手への謙譲(奉り)と動作主への尊敬(給ふ)が重なった、二方向の敬語です。

問13 訳：「(かぐや姫は)帝にお手紙を差し上げなさる。」

「朝廷(おほやけ)」はここでは帝(天皇)を指します。「御文」は「お手紙」、「奉り」は「差し上げる」、「給ふ」は動作主のかぐや姫を敬う尊敬語です。

問14 かぐや姫は天の羽衣を着せられると、それまで翁を「いとほし、かなし(気の毒だ・いとしい)」と思っていた気持ちさえも消えてしまい、「もの思ひなく(何の物思いもなく)」なってしまった。つまり、人間としての情や悲しみを失い、心が天人のものに変わってしまったのである。

問15 (あ) 「思し」…「思ふ」の尊敬語「思す(おぼす)」で、「お思いになる」の意。動作主であるかぐや姫を高めています。

(い) 「つる」…完了(存続)の助動詞「つ」の連体形。下の「こと」(体言)に続くため連体形になっています。「思しつること」＝「お思いになっていたことも」。

問16 戸や格子が、人が手を触れないのにひとりで開いてしまっていることから、天人は人間の力では防ぎようのない、超自然的(神秘的)な力を持っていることが読み取れる。だからこそ、翁・嫗がいくら引きとめようとしても「えとどむまじ」(とどめることができそうにない)のである。

問17 「たださし仰ぎて泣きをり」(10字)。

引きとめることもできず、ただ天を見上げて泣くばかりだ、という、なすすべのない悲しみが表れています。

問18 (あ) きよら…「(この上なく)美しく清らかなこと・気高く美しいさま」。

(い) いとほし…「気の毒だ・かわいそうだ/いとしい」。

(う) 形見…「(別れた人を)思い出すよりどころとなる品・記念の品」。

問19 (あ) 心もとながり…「待ち遠しく思って・じれったがって(いらいらして)」。

(い) 具す…「引き連れる・伴う/一緒に連れていく」。

問20 竹取物語は、現存する日本最古の作り物語(つくりものがたり)とされ、後の物語文学の出発点・源流となった作品である。だからこそ『源氏物語』(絵合の巻)で「物語の出で来はじめの祖(おや)」＝多く

の物語が生まれるおおもと（始祖）と評された、という意味である。

---

問21 伝奇物語（でんきものがたり）。空想的・超自然的な内容を中心とする物語のジャンルを指す。

---

問22 （あ）作り物語（つくりものがたり）。

（い）『伊勢物語』（または『大和物語』）。和歌を中心に短い物語が連なる「歌物語」の代表作で、空想的な筋を中心とする竹取物語（作り物語）とは系統が異なる。

---